

関西学院大学 研究成果報告

2024年 4月 2日

関西学院大学 学長殿

所属：文学部
職名：教授
氏名：東浦 弘樹

以下のとおり、報告いたします。

研究制度	☒ 特別研究期間 ☐ 自由研究期間 ☐ 大学共同研究 ☐ 個人特別研究費 ☐ 博士研究員 ※国際共同研究交通費補助については別様式にて作成してください。
研究課題	20世紀フランスの小説と戯曲、ならびに近現代演劇一般
研究実施場所	
研究期間	2023年 4月 1日 ～ 2024年 3月 31日 (12 ヶ月)

◆ 研究成果概要 (2,500字程度)

上記研究課題に即して実施したことを具体的に記述してください。

・「ロブ＝グリエの映画は面白い！」と題する論文を『りずむ』第13号（白樺サロンの会、2024年3月30日発行）に投稿した。

アラン・ロブ＝グリエは20世紀フランスの小説家で、所謂ヌーヴォー・ロマン（新しい小説）の中心的人物であるが、同時に映画監督でもあり、1963年の『不滅の女』を皮切りとして9本の映画を監督している。東浦はその9本——『不滅の女』（1963）、『ヨーロッパ横断急行』（1966）、『嘘をつく男』（1968）、『エデン、その後』（1970）、『Nは骰子を振った…』（1971）、『快樂の漸進的横滑り』（1974）、『危険な戯れ』（1975）、『囚われの美女』（1983）、『グラディエーヴァ、マラケシュの裸婦』（2006）——およびロブ＝グリエがシナリオを担当したアラン・レネ監督の映画『去年マリエンバートで』（1961）をサブスクやDVDで複数回視聴したうえで、論文の中で個々の作品をわかりやすく解説し、ロブ＝グリエの映画の特徴と魅力を明らかにしている。

・「サルトルの『アルトナの幽閉者』と大島渚の『儀式』」と題する論文を『人文論究』のために執筆した。

ジャン＝ポール・サルトルは20世紀フランスの哲学者・小説家であるが、極めてすぐれた劇作家でもある。論文ではこのサルトルの戯曲『アルトナの幽閉者』（1959）を大

島渚監督の映画『儀式』（1971）と比較し、一見何の関わりもないように思われる両作品がともに第二次大戦の敗戦国（『アルトナの幽閉者』ではドイツ、『儀式』では日本）の財閥一家を描いたイプセン風の家庭劇であり、絶大な権威と権力をもつ家長（『アルトナの幽閉者』では父親、『儀式』では祖父）の支配から逃れようとして逃れ得ない若者たちの姿を描いていることを明らかにした。

なお、『人文論究』は2024年3月下旬締め切り、同年5月中旬発行の予定であったが、発行元の関西学院大学人文学会が年度途中で雑誌の発行回数を年4回から年3回に改定したため、4月下旬締め切り、6月発行の予定となった。

・「サルトルの『アルトナの幽閉者』と大島渚の『儀式』」と題する研究発表を12月9日に日本サルトル学会（立教大学池袋キャンパス）で行った。

東浦は日本サルトル学会の澤田直氏からサルトルの演劇をテーマとする12月9日の例会でZoomでコーディネーターをして欲しいという依頼を受けた。その際、東浦はすでに上記の論文「サルトルの『アルトナの幽閉者』と大島渚の『儀式』」を書き終えており、そのことを澤田氏に伝えたところ是非それを口頭発表して欲しいと言われたため、実際に立教大学に赴き口頭発表を行うこととなった。

・『リハーサル』フランス語字幕付き、大阪公演（2024年1月13日・14日）およびパリ公演（2024年1月24日～27日）

『リハーサル』は東浦が執筆し、大阪・新町の2018年9月～2019年8月に毎月1回1年間ロングラン公演をした芝居である。演出は増田雄（MTC Project）で、出演は東浦弘樹、中野聡（劇団・宇宙ビール）、村上森子（舞夢プロ）の3人であった。

様々な方々のご助力でこの芝居をパリで公演する話が持ち上がり、東浦は芝居のフランス語字幕を作成し、初演と同じメンバーで大阪公演（@Regalo Gallery & Theatre）、パリ公演（Workshop ISSE）を行い好評を博した。東浦がパリで公演を行うのは2020年2月の『オズの部屋探し』に続いて2度目である。

東浦、増田、中野、村上の4名は1月19日に関西新空港を出発し、同日夜にパリのシャルルドゴール空港に到着。20日に会場となるパリ2区のレストランWorkshop ISSEに足を運び、オーナーの中沢須美子氏と打ち合わせを行い、22日にテクニカル・リハーサル、23日にゲネ（総稽古）を行い、24日から4日間にわたって公演を行なった。

おいでくださったお客さまは9：1か8：2でフランス人が多く、彼らが日本の現代演劇に興味を持っていること、しかしながらフランス語字幕付きでパリで日本の現代演劇が上演される機会はほとんどないことがわかった。

公演中やその前後には、国際カミュ研究会前会長のアニエス・スピーケル氏や現会長のアンヌ・プルトー氏、幹部メンバーのマリー＝テレーズ・ブロンドー氏、カミュ生誕100年にあたる2013年に『カミュと生きる』というドキュメンタリー映画を撮った映画監督のジョエル・カルメット氏、パリ・シャトレの劇場Espace Culturel Bertin Poiréeの芸術監督をしているトモコ・オオタニ氏、関西学院大学文学部出身で現在はパリのMaison de la Culture du Japon（日本文化会館）に勤務しているカリン・マスネリ氏、同じく関西学院大学文学部出身で現在は文部科学省職員としてパリ第8大学に派遣されている鳥居亀禄氏らと話をすることができた。特に今回の公演にご尽力をいただいたパリ・コンセルヴァトワール教授のルノー・ブータン氏と長時間にわたって話をし、日仏両国の演劇事情について情報交換・意見交換ができたのは大きな収穫であった。

そのほか2023年7月17日には奈良の志賀直哉旧居において「演劇の魅惑、魅惑の演劇」と題する講演を、同年10月5日にはアイアイ会主催の講演会で「ファム・ファタルの作り方」と題する講演を行なった。

最後に関西日仏学館（Institut Français du Kansai）との交渉についても述べておきたい。

関西日仏学館（京都）は単なるフランス語学校ではなく、フランス政府が管轄する組

織であり、関西におけるフランス文化発信の拠点であると同時に、関西に住むフランス人・フランス語話者コミュニティの中心でもある（現在フランス領事館はこの関西日仏学館内に置かれている）。

東浦はこの関西日仏学館で関西在住のフランス語話者に向けて日本文化を発信するイベントを行うことを考え、長期にわたって交渉した結果、2024年4月にフランコフォニー・フェスティバルの一環として関西学院大学文学部出身の能楽師・上田顕宗による能のイベント「能を知る」À La Découverte de Nô（東浦はフランス語通訳として参加）を、5月に東浦作・出演の芝居『マイ・スウィート・スウィート・ホーム』の上演（フランス語字幕付き）を行うことになった。窓口となってくれた関西日仏学館Vidéothèqueの責任者マイコ武井ベルナルト氏には深い感謝を捧げたい。

以 上

提出期限：研究期間終了後2ヶ月以内

※個人特別研究費：研究費支給年度終了後2ヶ月以内 博士研究員：期間終了まで

提出先：研究推進社会連携機構（NUC）

※特別研究期間、自由研究期間の報告は所属長、博士研究員は研究科委員長を経て提出してください。

◆研究成果概要は、大学ホームページにて公開します。研究遂行上大学ホームページでの公開に支障がある場合は研究推進社会連携機構までご連絡ください。